

# やどなし犬

鈴木三重吉

青空文庫



むかし、アメリカの或ある小さな町に、人のいい、はたらきものの肉屋がいました。冬なの半なかの或寒い朝のことでした。外そとは、ひどい風が雨を横なぐりにふきつけて、びゅうびゅうあ  
れつづけています。人々は、こうもりのえにかたくつかまりながら、ころがるようなかっ  
こうをして、つとめの場所へ出ていきます。肉屋は、店のわかいものたちと一しよに、か  
じかんだ手で、肉にく切きりぼうちようをといていました。

すると、店のまへのたたきのところへ、一ぴきのやせた犬がびしよぬれになって、のそ  
りのそりとやって来ました。そして、はげしいしぶきの中に、のこりとすわって、店先さかに  
下さがっている肉のかたまりを、じろじろ見上げていました。どこかのやどなし犬でしょう。  
肉屋もこれまで見たこともないきたならしい犬でした。骨ぐみは小さくもありませんが、  
どうしたのか、ひどくやせほそって、下腹したばらの皮もだらりとしなび下さがっています。寒い  
と、おそらくひもじいのと両方で、からだをぶるぶるふるわせ、下あごをがたがたさせな  
がら、引きつれたような、ぐったりした顔をして、じろじろと、かぎにかかった肉を見つ

めています。

肉屋は、おどけた目つきをして、ちよいちよいそのやせ犬を見やりながら、ほうちようをこすつていました。犬は肉屋の注意を引くように、ときどきくんくん鼻をならしてはこつちを見ます。そのうちに肉屋はほうちようをとぎおえて、刃先はさきをためすために、そばの大きな肉のはしの、ざらざらになったところを、少しばかり切り落しました。そして、

「ほら。」と言って、やせ犬にながてやりました。すると犬は、それが地じびたへおちないうちに、ぴよいと上手に口へうけて、ぱくりと一口にのみこんでしまいました。肉屋はおもしろはんぶんあとおしに、こんどは少し大きく切りとつて、ぽいとたかくなげて見ました。犬はさつと後あとおし足で立ち上つて、それをも上手にうけとり、がつがつと二どばかりかんでのみこみました。

「へえ、こいつはまるでかるわざ師だ。どうだい、牛一ぴきのこらずくうまでかるわざをやるつもりかい？ ほら、来た。よ、もう一つ。ほうら。よ、ほら。」と、肉屋はあとからく々と何どとなく切つてはなげました。犬は、そのたんびに、ぴよいぴよいと上手にとつて、ぱくぱく食べてしまいます。

「おまいは、おれの店の肉をみんななくつていく気だな？ さあ、もうこれでおしまいだ。」

そのかわり少々かたいぞ。」と、肉屋は最後に、出来るだけわるいとところをどっさり切つてなげつけました。しかし、犬はもうそのしまいの一きれだけは食べようともせずに、しばらくそれをじろじろ見つめています。

「何だ。何を考えてるんだい。」と肉屋は思いました。そのうちに、犬はふと、その肉をくわえるなり、どンドン、町角まちかどの方へかけさつてしまいました。

そのあくる日は、からりと晴れたいいお天気でした。きのうの雨できれいにあらわれた往来にはもくもくと黄色い日かげがさしています。人々はいいかわらず急ぎ足で仕事に出ていきます。肉屋は、きようは極上等ごくじょうとうの肉をどっさりつるして、お客をまっています。すると、そこへ、きのうの犬がまたのこりと出て来て、同じように、たたきの上になつたまま、じろじろと肉のきれを見上げています。

「ほう、また来たな。」と肉屋は言いました。

「来い来い。はいつて来い。」と、チュツチュツと舌をならしますと、犬はこわごわ店の中へはいつて来ました。

「ほら、ここまで来い。どら。」と肉屋はごこんで、かるく犬ののどの下をもち上げながら、

「へえ、かわいい目つきをしてるね、おまいは。毛並けなみもよくちぢれていて上等だ。ちよつと歯を見せろ。歯なみもなかなかりっぱだ。おまいはおれの店の番人になるか。え？ 今いまんとこはまったくやせ犬の見本みたいだが、二週間もたてばむくむくこえていい犬になる。おい、おれんところにもいい犬がいたんだよ。そいつがにげ出して殺されたんだ。おまいは、かわりに、おれんところの子になるか。なる？ おお、よしよし。」

肉屋が右手でくびのところをだくようにしますと、犬は、言われたことがわかったように、肉屋の左手の甲をぺろぺろなめました。犬はそのまま夕方まで肉屋の店先で番をしました。あたりの犬たちが出て来て、店の中へもぐりこもうとでもしますと、やせ犬はうとうときばをむいておいまくり、うろんくさい乞食こじきが店先に立つと、わんわんほえておいのけてしまいます。それはなかなか気がきいたものです。とおりに何かへんな物音がすると、すぐにとんでいって、じいっと見きわめをつけ何でもないとわかればのそのそかえって、店先にすわっているという調子です。

日がいると、肉屋はくちぶえをならしてよび入れました。そして、やさしく背中をたたいたあとで、大きな肉のきれをなげてやりました。ところが犬はそれをたべないで、口にくわえて外そとへ出てしまいました。そして、どんどん走って、きのうのとおり、町かど

の向うへかき消えてしまいました。

「何だ。」と肉屋は、すつぽかされたような気がしました。しかし、あんなにおれになつて、いちんちじゅう一日中番をしていたくらいだから、夜になつたらまたかえつて来るかも知れないと思ひながら、それとはなしにまつていましたが、夜おそくなくても、犬はそれなりとうとうかえつて来ませんでした。

「やつぱりのら犬はのら犬だ。一ぺんでいつちまやがった。」と、肉屋は寝がけに一人ごとを言いました。

ところが、あくる朝、店のものが戸をあけますと、犬は、もうとくから外へ来てまちうけていたように、ついと店へはいつて、うれしそうに尾をふつて肉屋のひざにとびつきました。

「よし〜〜。分つたよ〜。」と肉屋は犬の両前足をにぎつて、外のたたきの方へつれていきました。犬はそれからまた一日中、店先において、一生けんめいに番をしました。肉屋は夕方になると頭をなでて、きのうのとおり、大きな肉のきれをやりました。ところが犬は、やはりそれを食べないで、口にくわえたまま、またどこかへいつてしまいました。そしてあくる朝はまたちゃんとして出て来て、店の番をしました。

とうとう一週間たちましたが、犬は毎日同じように、もらった肉を食べなくてもつきまします。肉屋は、一たいああして肉をくわえてどこへもつていくのだろう、一日中おれのところにおりながら、どうして夜はきまつて、ほかのところでは寝るのだろうと、店のものたちと話し合いました。

「おいおい、きょうもまた食わないでもつてったよ。一つあとをつけてつて見よう。来な。」と、肉屋は或日店あるひのもの一人をつれて、ついでいきました。夕方は人どおりも少ないために、肉屋と店のものとは、犬のすがたを見失うこともなく、歩いたり走ったりして、どンドンついていきました。

「何だ。どこまでいくんだらう。え、おい。ずいぶん遠くまで来たじゃないか。」

犬はまだどンドンいつて、とうとう町のはずれまで来てしまいました。そこには、ばらばらに小さい家が建ちぐさつたりしている、どすぐらい、ひろい砂地がありました。そのあたりは、冬は風がはげしくて、砂がじやりじやり家々の窓や、とおる人の顔へふきとんで来ます。

「おお、ひどい砂だ。」と言いながら、肉屋は犬のあとから、そのところをななめにつつきつけてかけていきました。犬は肉屋たちがおっかけて来ていることには気がつかないら

しいのです。そしてそこいらの或こゝろ小家のところまで来ますと、さもかえるところまでかえったというように、その家のうしろの方へのそのそはいつていきました。

肉屋たち二人は、そつといつてのぞいて見ました。家のうしろは、ちよつとした空地あきちで、まん中に何かをたてようとした足場らしいものが、くずれかけたまま、ほうりっぱなされており、ぐるり一面にはごみくずや、いろんなきたならしいものが、ごたごたすててあります。犬はその空地の片すみにころがっている、底も天井もぬけた、古ぼけた穀物だるの口もとにすわりこみました。たるの中には、かんなくずや砂なぞがくしゃくしゃにはいっています。そのかんなくずの上に、何なんだかしゆるであんだ、ぼろぼろの靴くつぬぐいをまるめ上げたような、そういう色とかつこうをしたものがころがっています。犬は、そのへんなもののまえに、くわえて来た肉のきれをおいて、くんくんなきつづけました。しかしそのへんなものが動き出しもしないので、犬はたまりかねたように、前足をあげて、おい、おきろ〜と言わないばかりにつつきました。

すると靴ぬぐいのようなものは、むくむくと半なかたち上あつて、よろよろと肉のきれのそばへ来て、たおれるように腹はらばいました。栗色をした、よぼよぼの犬です。病気でひどくよわっていると見えて、やせ犬のくれた肉のきれをものうそうに二、三どなめまわしました

が、それを食べる力もないように、そのままぐんなりと顔を下げてしまいました。こちらの犬は、

「さ、早くお上りよ。<sup>あが</sup>よ。よ。」と言うように、くんくん言っていました。けれどもまだ食べようとしないので、相手の食慾をそろうとするように、その肉のきれのかどを、小さく食い切つて、ぺちやぺちやと食べて見せました。それでも病犬は、じつとしたまま動きません。こちらの犬は、しかたなしに、こんどは肉のきれを、二、三尺うしろの方へ引きずつて来て、それを前足の間<sup>あいだ</sup>においてすわり、さも病犬をさそい出そうとするように、口の先で肉をつつつきくしては、じつとまっています。

「さ、来て食べてごらん。おいしいよ。ね、ほら。うまそうだろう。食べない？ きみが食べなけりや、わたしがみんな食べるよ。いいかい。食べてもいいかい。」と言わぬばかりに、しきりにくんくんないたりしました。しかし、いくら手をかえてすすめてもだめでした。病犬はちゆうとで一ど、よろよろと出て来て、肉のはしをちよつとかんで見ました。またのそのそとかんなくずの中へかえつてうずくまり、目をつぶつてうとうとと眠りかけました。

こちらの犬は、肉のきれをくわえていって、その犬の口のところへおき、じぶんも中に

はいつて砂だらけのかんなくずを、かきまわしたり、ならしたりして、病犬のそばへ一しよに寝ころびました。肉屋たちは、じつとすべてを見ていました。

「おい、もうかえろう。暗くなつた。ほんとに感心なものだね。われわれ人間の中にも、あれほど情ぶかい、いきとどいたやつはちよつといないぜ。毎日朝からおれんところではたらいて、夕方になると肉をもつて来てあの犬に食わしてるんだ。見上げたものじゃないか。」と肉屋は、しみじみこう言いました。

「まつたくです。だが、だんな、あの犬は、ものが食べたいよりも、のどがかわいてるのじゃないでしょうか。水がのみたくても、あれじゃさがしに歩けないでしょうから。」と店のものが言いました。

「ふん、なアるほど。そいつアよく言った。どこかに水は目つからないかな。あ、そのへんなちつぽけな家には、だれか住んでるよ。」と肉屋は、空地の向うの家の戸口へいつて、

「もしもしちよつと。どなたかいらつしやいませんか。」と言って、戸をたたきました。すると、中から、うすぎたない女が戸をあけました。肉屋は今の病犬のことを話して、かわいそうですから水をのましてやりたいのですが、と言いますと、女は、小さなあきかん

へ水を入れてもつて来てくれました。肉屋がそれを病犬の口もとへおきますと、犬はすぐにくびをのぼして、ぺちやぺちやと、一気に半分ばかりのみほしました。そして、さもうれしそうに、くびをふりふりしました。もう一つの犬も口をつけてぴちやぴちやのみました。病犬は水を飲んだために、少しは元気がついたように見えました。肉屋は、骨と皮とばかりの、そのからだをなでてやり、

「じゃア、よくおやすみ。あすまた見に来てやるからな。おおく、かわいそうに。——おまいもあしたまたおいで。」と、もう一つの犬をもなでていきました。

## 二

あくる朝、肉屋がいつもの時間に店をあけますと、犬はもうちゃんと来てまっついて、くんくん言いながら尾をふります。肉屋は町中じゆうちゆうの人々や、買い物かいものに來たお客たちに一々その犬の話をして聞かせました。すると、だれもかれも、

「へえ。」と感心して、犬を見入ったり、くびをなでたりしていきます。犬はやはり夕方まで店の番をつづけました。肉屋はきようは肉の分量を少しおおくしてやりました。犬は

あいかわらずそれをくわえてかえっていききました。肉屋はそのあとから、水さしに水を入れて、それをもつてついていきました。

「どら、おれもいつて見よう。」と、話を聞いた、となりの人も一しよに出かけました。

それからいく週間もたちました。感心な犬の話は、そこからかしこへとつたわって、町中で大評判になり、わざわざ肉を買いがてら見に来る人もあつたりして、肉屋はほんじょうしました。

そのうちに夏が来ました。或朝のことです、これまではいつもひとりで来つづけていた犬は、その日は、ほかの一ぴきの犬と二人で店先へ来ていました。犬は、つれの犬を肉屋にひきあわすように、くんくん言い言い尾をふりました。片方は、やせ骨ばって、よろよろしています。それが、こわごわ肉屋の足もとへ来て、顔を見上げました。れいの病犬が歩けるようになって、一しよに来たのです。肉屋は、

「おお、よく来たね。」と、病犬をなでて、上等の肉を切つてなげてやりますと、すぐにかつがつ食べました。先せんからの犬はそれを見て、さも満足したように尾をふりました。それから毎朝ふたりで出て来ました。ふたりとも店の中へは、めつたにはいらないうで、しき石の上になすわつていたり、そこいらを歩いて来たりします。ふたりがけんかなぞをした

ことは、ただのいどもありません。夕方になると、いつも肉のきれをもらって食べて、ふたりで町はずれの寝場所へかえっていきます。町ののら犬たちも、このふたりが肉屋のまえにいろのを、もうあたりまえのように思つて、けつしてあらせいもせず、さつきとおつていきます。たまに、はじめてまよいこんで来た犬などが、肉屋の店先にでも近よりますと、ふたりの犬はうんうんおこつて、すぐにみぞの中へおとしこんだりします。そのころでは、もはや、町中全部の人が、そのふたりの犬のことを話にのぼしました。

そのうちに、町には急に或大工場が出来て、何千人という職工たちが移住して来ました。そのため、町の外へは、どんどん家がたちつまりました。こうして町が大きくなるにつれて、方々からいろいろの人がどつきり入りこんで来ます。その中には、浮浪人もかなりたくさんいて、いろいろわるいことばかりするので、警察も急にいろいろのやかましい法令をつくり、ついで衛生上のことにもあれこれと手をつくし出した結果、**恐水病**をふせぐために、町中に、のら犬を歩かせないことにきめてしまいました。その手段として、警察では、ほろのついた、大きな野犬運ばん用のはこ車をつくり、それを馬にひかせて、飼主のわからない犬を見つけると、片はしからつかまえてつんでいき、きまつた撲殺場へもつてつて殺しました。

ほろ馬車のはこは、鉄のこうしがはまって、中に入れられた犬が見えるようになってあります。ふとしてくび輪をつけわすれたりしていたために、野犬としてつかまえていかれた場合には、警察へいつて罰金をおさめると、はこから出してわたしてくれるのです。町の人たちの中には、このとりしまり法のために、たとえ野犬でも、いつも来なれていた犬がどんどんひつくくられていくので、恐水病のおそれよりもまえに、じつにひどいことをすると、警察へ悪感情をいだくものがずいぶんいました。

或日、そのほろ馬車の一つが、びつこの馬へびしむちを入れながら、でこぼこのしき石の上をがたがたと、肉屋のとおりへはいつて来ました。

「やあ、来た来た、犬殺しの馬車が来た。」と、向いの人が往来でどなりました。肉屋は、「どら。」と言つて出て見ました。馬車のうしろには巡査が乗つて、野犬はいないかと目を光らせています。

「だんな、うちの犬が二ひきとも見えないがだいじょうぶでしようか。」と店のものが言いました。

「何<sup>な</sup>あ<sup>あ</sup>に、あいつは二ひきともきびんだからだいじょうぶだよ。」と言っているうちに、馬車は、十四、五間<sup>けん</sup>手前で、ぱたりととまりました。

「おや。」と思つて見ていますと、巡査は、先に針金の輪のついた、へんな棒きれをもつたまま、馬車を下りて、その横丁へはいつていきました。と、一分間もたたないうちに、巡査は、犬を一ぴきつかまえて引きずつて来ました。犬はきやんきやんなきなきていこうしましたが、くびに綱を引っかけて、ぐんぐん引っぱられるのですからかないません。馬車使は、すばやく鉄ごうしの戸をあけました。犬はたちまちその中へなげ入れられ、綱をとかれてとじこめられてしまいました。

「あきれたね。」と言いながら、肉屋は馬車に近づきました。警官は馬車のうしろへ乗りました。馬車使はちよつととび下りて馬の頬革をしめなおしています。肉屋がのぞいて見ますと、中には二十ぴきばかりの犬がごろごろしています。まさか、うちの犬はいないだろうな、と、よく見ようとするとたんに、「わうわう。」と、かなしそうなうなり声を上げた犬がいます。肉屋は、おやつとびつくりしました。うちの犬がつかまっているのです。病犬もいます。二ひきともやられてしまったのです。馬車使は車台へあがりました。「おいおい、ちよつとまった。」と、肉屋はまっ青になって、馬のくつわを引ツつかみながら、巡査に向つて、

「もしもし、私んとこの犬を二ひきとも出して下さい。何という乱暴なことをするんだ。」

と喰つてかかりました。

「どけよ。野犬なら仕方がないじゃないか。こら。」と言いながら、馬車使は、ぴしんとむちで肉屋をなぐり、馬にもびしびしむちをあてて、かけ出そうとしました。

「ちきしよう、人をぶちやアがったな。」と言いながら、肉屋は、すんと馬車使を引きずりおろしてつきはなし、馬の口をもつて、むりやりに店先の方へまわすはずみに、馬は足をすべらして、ばたんとたおれかけました。

「何だ何だ。」

「どうしたんだ。」と、町中のもはや通行人たちがどやどやかけつけて来ました。

「こいつらがおれんとこのあの犬を、二ひきともひつくくりやアがったんだ。下りろ、きさま。」と肉屋は巡査の足をつかまえて、むりやりに引きずり下しました。人々はみんな、

あの二ひきの犬の同情者であるの言うまでもありません。みんなは、

「なぐれなぐれ。」と言つて、巡査をとりかこみました。そのうちに、気の早い男が、大きな大おのをかかえて来て、がちやんくと馬車をこわしはじめました。巡査はみんなにつきとばされ、けりつけられて、よろよろしながら、そばの或店の中へにげこみました。その間に、またある一人が鉄の棒をもつて来て、がちやんがちやんと馬車をたたきつけ、

とうとうふたりで鉄ごうしをやぶってしまいました。中の犬たちはおおよろこびでとび出して、八方へにげていきました。肉屋の二ひきの犬は肉屋の足もとへとんで来て、くくん言つてよろこびました。

こんなさわぎがあつてから、二、三年の後のちです。ふたりは、やはり毎日一しよに出て来ましたが、そのうちに、もと病犬だった方は、だんだんに皮ひふのつやがなくなり、のちには、あばら骨がかぞえられるほどやせて来て、食べものもろくに食べなくなり、店先へ出て来ても、ただ一日じゆう、しき石の上にごろりとなつたきりで、ときには、何時間となく、こんこんと眠りつづけています。目も急にかすんで来たようです。肉屋はくびをかしげて考えました。

夕方になると、その犬は、もうひとりの犬について、よちよちと寝どころへかえつていきます。ところが或とき、犬は一ぴきだけ来て、そのやせた犬は一いちんち日すがたを見せない日がありました。出て来た方は、夕方になると、もらった肉のきれを食べないでくわえてかえりました。

「ふふん、とうとうまた寝ついてしまったな。」と言ひ言ひ、肉屋は、あとからついていつて見ました。犬の寝場所は、もとのところは、家でもたちつまつておいたてられたと見

えて、先<sup>せん</sup>とはちがった場<sup>ば</sup>末<sup>すえ</sup>の、きたない空地<sup>あきち</sup>にうつっていました。病犬は、そこころがっている古材木<sup>ふる</sup>の下にこごまって、苦しそうに腹<sup>はら</sup>でいきをしました。

肉屋は、あくる日、大きなあきだるをもつて来て、わらをどつきり入れて、小屋<sup>こや</sup>がわりにおいてやりました。そのあくる日は、どうしたものか、じょうぶな方の犬も出て来ません。肉屋はへんだとおもっていつて見ますと、じょうぶな方の犬はたるのまえにすわって、中<sup>ちゆう</sup>にいる病犬の見<sup>けん</sup>はりをしていました。

「おい、どうしたい。」と、そのくびをなでたのち、

「これこれ、おれだよ。おきないか、おい。」と言って、中の犬をよびました。しかし犬は、目もあけないで、ぐんなりしているので、肉屋はひきおこしてやろうと思つて、手<sup>て</sup>のぼして、からだにさわりましたが、いきなり、あつと言って手を引<sup>ひ</sup>っこめました。犬は、もう死んでつめ<sup>つま</sup>なくなっていたのです。

肉屋は、そこいらの片<sup>かた</sup>すみへ穴<sup>あな</sup>をほつて、おおく、かわいそうにく<sup>く</sup>と言<sup>い</sup>い言<sup>い</sup>い、死<sup>し</sup>がい<sup>がい</sup>をうめてやり、その上<sup>うへ</sup>へ土<sup>つち</sup>をもり上げました。もうひとつの犬は、かなしそうに、く<sup>く</sup>ん<sup>ん</sup>く<sup>く</sup>ん<sup>ん</sup>なきなきうろ<sup>うろ</sup>ろ<sup>ろ</sup>していました。

その翌<sup>あつ</sup>る日、肉屋は、のこつた犬をその空地<sup>あきち</sup>へかえさないようにして、すべてをわすれ

させてやろうと思つて、じぶんの家のうら手へきれいなわらをしいたはこをすえてやりました。しかし犬はどうしてもそこへ寝ないで、かえつていきます。ときには、もらった肉を、そのままくわえていくこともありました。へんだと思つて、そのつぎの日についていつて見ますと、きのうもつてかえつた肉は、そのままたるのまえにころがつていました。犬は、ときどきあの犬がなくなつてしまつたのをわすれて、ものを食べさせようと思つてはもつてかえるものと見えます。店先へ来ている間も死んだ犬と同じ毛色の犬がとおりかかると、いそいでとび出して、じろじろ見ていますが、間ちがつたとわかると、さもがっかりしたように、しおしおとひきかえして来ます。

犬はその後、<sup>のち</sup>だんだんにやせて元気がなくなつて来ました。出て来ても、これまでのように、店の番もせず、何かなくしたものをさがすように、そこいらをまわつて歩いたり、からになつたような目つきをして、ものうそうに一つところを見つめていたりします。毛色も目立つて灰色になり、皮ふがたるんで、だんだんにあばら骨まで見えて来ました。肉屋は、そのすべてが、みんなあの犬をうしなつたかなしみから来ているのだと思うと、かわいそうでたまりませんでした。

その年の冬近くでした。犬はいよくよぼくにおとろえてしまいました。或日、<sup>いちん</sup>一

日中<sup>ちぢゆう</sup>ちつともすがたを見せないの、肉屋は夕方、れいの空地へ出かけて見ますと、犬は、たるの中で死んでいました。

肉屋は、その死がいをいつまでもなでつづけていましたが、間もなく、うちへかえって、シャベルとズツクのきれとをもって来ました。そして、せんの犬の塚<sup>つか</sup>のとなりへ穴をほり、死がいをていねいにズツクのきれでつつんで中へ入れ、ちゃんと土をもり上げました。そしてシャベルの土をおとしおとししていました、とうとうたまらなくなつて、おんおん泣き出しました。



# 青空文庫情報

底本：「鈴木三重吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年11月18日第1刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集」文泉堂書店

1975（昭和50）年

初出：「赤い鳥」

1924（大正13）年1月

入力：鈴木厚司

校正：佳代子

2004年1月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# やどなし犬

鈴木三重吉

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>